

まことの信仰 信仰の核心とは何か

ハイデルベルク信仰問答第 21 問答

2004 年 6 月 20 日

松戸小金原教会 関口 康

序 「なぜ教理を学ばねばならないか」という問いへの一つの応答

わたしの牧師人生を変えた岡田稔先生の言葉（1948 年）：

「信条は本来説教者が聖書を解説する時の道案内である。説教者が毎日曜日の礼拝に自由に聖書のここかしこを解説する時、はたしてその所説に首尾一貫性を見出しうるだろうか。ロマ書の三章はアウグスティーン主義で十二章はペラギウス主義でそれを解説するような危険が起ころぬと誰が保障できるか。まして、この教師とかの教師が同じ聖句を同じ原理で説くなどはとても思いも及ばぬのである。かくして信者は、何年教会に出席してもキリスト教の筋道さえも判然せぬまま死去するということになりはしないか」¹。

これは、すでに教会の現場で働いていたわたしにとって重い言葉であった。教理の学びはわたしたちの“生涯”にとって必要な営みであることを腹の底で知る機会となった。

わたしたちは“ヒマだから”教会に通っているわけでは決してない。時間も力も惜しみなくささげてきた。教理の学びは、わたしたちが長年にわたって、教会に対してささげてきたものすべてが、決して無駄でも無意味でもなかった、という確信へと導き、わたしの心を感謝と喜びで満たす。

もちろん、神の恵みは、永遠に変わることがない。しかし、わたしたちの信仰は弱く、ことあるごとに揺れ動く。わたしたちの信仰が弱い。だからこそ、「神の恵みの手段」と呼ばれる教会の存在理由がある。

ところが、教会は、命あるものであるゆえに、時代と共に変わって行きやすい性質を、避けがたく持っている。そこに、わたしたちの信仰の危機もある。

しかし、だからこそ、わたしたちは、牧師や説教者が交代しても、通う教会が変わっても、わたしたちの信仰は変わることがない、と告白できるようになりたいのだ。そのように告白しうるためにこそ、教理の学びが必要なのである。

¹ 「植村・高倉神学の行方」『岡田稔著作集』第 5 巻、いのちのことば社、26～27 頁。

1. ハイデルベルク信仰問答における「まことの信仰」の定義

現在、ハイデルベルク信仰問答の日本語訳には、日本キリスト改革派教会に属する以下の二人の翻訳があり、いずれも広く用いられている。

A. 春名純人訳

第 21 問 真実（まこと）の信仰とは、何ですか。

答 真実の信仰とは、神が御言葉において、わたしたちに、啓示されたすべてのことを、みな真理と見なす、確実な認識のことであるばかりでなく、

聖霊が、福音によって、わたしたちの心に起こして下さる、心からの信頼のことでもあります。

それによって、罪の赦しと永遠の義と救いが、他の人にばかりでなく、このわたしに、神から与えられていること、しかも、それが、ただ恩恵（めぐみ）により、キリストの御業のゆえに、与えられていることを確信するのです。

B. 吉田 隆訳

第 21 問 まことの信仰とは何ですか。

答 それは、神が御言葉において

わたしたちに啓示されたことすべてを

わたしが真実であると確信する、

その確かな認識のことだけでなく、

福音を通して聖霊がわたしのうちに起こして下さる、

心からの信頼のことでもあります。

それによって、他の人々のみならずこのわたしにも、

罪の赦しと永遠の義と救いとが神から与えられるのです。

それは全く恵みにより、ただキリストの功績によるものです。（下線は筆者）

吉田訳の下線部分は、春名訳よりも原文に忠実である。神が「わたしたち」（全人類、というほどの意味か）に啓示されたことすべてを「わたし」（読者であるこのわたし）が真実であると確信することが「まことの信仰」であるとハイデルベルク信仰問答は述べている。このようにして、「わたしたち」と「わたし」を使い分けているところに注目すべきである。

2、認識と信頼

ハイデルベルク信仰問答は、「まことの信仰」を「確実な認識」と「心からの信頼」との二つの言葉で説明している。

(1) 信仰とは認識である

「神が御言葉において、わたしたちに、啓示されたすべてのこと」とある中の「御言葉」は「聖書」と読み替えても構わない、交換可能な表現であると言える。聖書における啓示を真理とみなす確実な認識とは何か。おそらく、それを最も正しく表現する言葉は「神学」であろう。

信仰とは認識である。このように語るハイデルベルク信仰問答の言葉の歴史的背景には、当時のローマ・カトリック教会が信徒に要求した「黙従的信仰」への厳しい批判があるとされる²。

教会の聖職者の教えに黙って従うことは、ある意味で気楽なものかもしれない。しかし、教会も間違いを犯すことがある。そのとき、黙従的な信仰者は、教会と自分自身の間違いに気づくことができない場合がある。だからこそ、確実な認識としての「まことの信仰」は、教会の自己批判の学としての「神学」を必要としているのである。

しかし、ハイデルベルク信仰問答は、ここで「・・・だけではなく、・・・でもある」と語る。大切なことは「神学」だけではない。なるほど「神学」も大事であるが、それだけではない。じつは、もっと大事なことがある。それは「福音を通して聖霊がわたしのうちに起こしてくださる、心からの信頼」(吉田訳)である。このように語っているのである。

(2) 信仰とは信頼である

信仰とは信頼である、という命題の説明をする前に、見ておきたい文章がある。「それによって、罪の赦しと永遠の義と救いが、他の人にばかりでなく、このわたしに」である。この「他の人にばかりでなく」を、わたしは、いくらか意識ぎみに「他人事ではなく」と訳してみたい。こうすれば、ハイデルベルク信仰問答が、ここで言わんとしていることの意図が、非常に明確になるはずである。

この信仰問答が「わたしたち」と「わたし」とを明確に区別していることについては、

² W. フェアボーム著『ハイデルベルク信仰問答の神学』、ブーケンセントルム社、1996年、60ページ。

すでに述べた。そのことを、今また思い起こしたい。ハイデルベルク信仰問答は、ここで、信仰とは「わたしたちのこと」だけではないし、まさか「他人事」であろうはずがなく、あくまでも「このわたし」の事柄である、ということ、懸念に訴えている、と読めないだろうか。

たとえば、もし、聖書の御言葉が「他人事」とどまることなく、それゆえ、頭の上を通り過ぎていく、とか、右の耳から入って左の耳に抜けていく、とか、わたしの人生には関係がないと感じる、というようなことでなくなるならば、

つまり、それまでとは全く反対に、聖書の御言葉が、興味深いものとなり、自分の人生に関係があると実感でき、耳をそばだてて聞くことができるようになるならば、

そこにはすでに、その人の人生において大きな変化が起こっているのである。そのときには、福音によって聖霊（なる神！）がわたしのうちに（聖書に啓示されたすべてのことへの）「心からの信頼」を呼び起こしてくださっているのである。

結局のところ、信仰とは信頼であるという場合の「信頼」とは、言ってみれば、かつて他人事であったことが「わたしのこと」であると分かったときに起こる“喜び”そのものではないだろうか。はたして、福音（喜びの知らせ）とは、「わたしを喜ばせる知らせ」でなくて、何であろうか。

3、聖霊のみわざとしての信仰

ところで、ハイデルベルク信仰問答は、信仰というものを、人間固有の敬虔な信仰心のようなものに帰するのではなく、聖霊なる神のみわざとしてとらえている。聖霊なる神が働いてくださるときに、このわたしのうちに信仰が呼び起こされる。しかし、それはどのようにして起こるのだろうか。

ハイデルベルク信仰問答は、「説教と聖礼典」の必要を語る（第 65 問の答え）、この二つの手段を、聖霊なる神がお用いになるのである。

説教と聖礼典という二つの事柄が、牧師の守備範囲にあることは、間違いない。牧師の責任は重大である。講壇から語られる説教が人々の心の中で「これはわたしのことである」と受けとめられるには、どうしたらよいのだろうか。

説教者と聴衆が、聖霊の働きを求めて祈ることが大切である。しかし、説教を準備するのは説教者以外の何者でもない（他の人がしてくれるのだろうか）。説教者が聴衆の状況をよく知ること。そのために、牧師と信徒の間に不断のコミュニケーションが必要である。